

# 夏の宴

文風 冴月

# 傷痕

---

ある日、もう少しで治りそうな傷痕が私に言った。

「どうか、もう一度傷をつけて。私を傷痕でいさせて」

ほっそりとした声だった。初めて聞くその声は、然し私の鼓膜には心地よく感じられた。懐かしい音だったのだ。

短い間でもいつも一緒にいた傷痕がそう言うのだ。仕方がない。すぐに私は自分に傷をつけた。傷痕のお礼の言葉に少し嬉しくなった。

それから定期的に、私は傷痕を傷痕でいさせる為に自分を傷つけた。

傷をつける時、ぴりとした痛みが全身を貫く。それでも何故だろう。止めたくないのだ。傷痕が大切だから？ 判らない。判らない。傷痕が消えてしまうのが怖いから？ 解らない。解らない。

「この頃疲れているみたい。大丈夫？」

心配そうに尋ねる傷痕に、私は精一杯の笑顔で答える。大丈夫だよ。私は大丈夫だから。だから、私と一緒にいて。

子供の頃から独りだった。私はいつも独りだったのだ。

ドジで鈍間で単純で容姿も良くないし頭も良くない、そんな自分は独りぼっちで当たり前だと思った。そんな自分が嫌いだった。いじめられないだけマシなのだろう。私と友達になるなんて、なんて物好きなのだろう。そう思ったりもしたけど、世の中には結構物好きが多いのだ。実際、友達と呼べる存在はそれなりにいる。けれど、友達がいても私はいつも独りだった。一人ではなかったけれど、独りだった。心はいつも渴いていて、瞳はいつも空ばかり見ていた。二本の足で歩いていきたい場所なんてないから。地面を見るより空を見ていたかったのだ。

空ばかり見ていたら、当然ながらよく転ぶ。物にぶつかる。気づいたら左手の甲に裂傷が出来ていた。いつ出来たのだろう。全く覚えがない。傷というものは不思議で、傷がある、と知った瞬間に痛みが込み上げてくる。気がつかなければ痛みなど感じないのだろうか？

左手の傷は数日で癒える。その筈だった。

あの日傷痕に話しかけられてから、傷が治ることはなくなった。

孤独な私に話しかけてきてくれたのは、他でもない私の傷なのだ。

「ねえ、私たちずうっと一緒にいましょうよ。とても良い考えだと思うの」

傷痕が囁く様に言った。ずっと一緒。なんと良い響きなのだろう。

そうか。

私はたった今気がついた。如何して友達が周りにいるにも拘らず孤独を感じてきたのか。それは、他人とは一生一緒にいることなど出来ないからだ。四六時中行動を共にすることなど不可能なのだ。他人は他人のまま。自分とは全く違う存在。他人。名前性別血液型身長体重行動原理脳顔声目耳鼻口指手腕足腰腹胸唇眉瞼睫輪郭骨格髪型家族構成成績住所意識身体心違う、違う。

傷痕をそっと撫でる。ずうっと一緒にいよう。大丈夫、絶対に傷痕は消さないから。死ぬまで離れない。他人ではない私自身の身体についた傷。この時ばかりは私は私自身への嫌気というものが薄れたのを実感した。

「ふふっ、くすぐったいわ。撫でるのは止して頂戴」

とても止めて欲しいとは思っていないだろう声で囁く傷痕。愛しい傷痕は今も私の左手にいる。これからもい続けるだろう。ずっと一緒なのだから。

目が覚めた。仄暗い。此処は何処だろう。

目が徐々に慣れてくる。薄暗い廊下。壁と天井は黒くくすんでいて、本当にそこに存在するのかすら疑わしい。上半身を起こし、辺りを見回す。まだ暗さに完全に慣れない。

かさり、という音が背後で聞こえた。振り返って見てもそこには漆黒が広がっているだけだ。何も見えない。此処は何処だ。

廊下、とは言ってもそれが、何処か、という問いに対する明確な解ではない。此処は一体……。

かさり、とまた聞こえた。何の音だろう。きしきしと何かが擦れる音も聞こえる。

床に着いていた手に、違和感があった。何かが触れている様な、むず痒さ。目を凝らして見やると、手の甲に蟻の行列が出来ていた。ぞろぞろと蟻が歩いている。薄闇の中でも怪しく光る光沢ある身体。

手を空中に振って蟻たちを掃う。何故屋内に蟻などいるのだろうか。そう思った時、腕を何かが這う感触がした。袖の中に何かが入り込んだのだ。手を突っ込んでそいつを掴み、袖から引き抜く。そいつは一匹の芋虫だった。すぐに床に捨てた。

何なのだろうか。此処には壁もあり天井もある。だのに何故、虫が入ってきているのだ。

漸く目が暗さに馴染んだ。然し、何処を見ても此処は廊下だった。一先ず立ち上がる。さて、如何したものか。思案していると、不快な音が聞こえた。暗くて確認出来ないが、これは蚊だ。蚊が飛んでいる。

何処だ。

何処にいる。

遮二無二手を振って蚊を追い払っていると、顔に何か当たった。慌てて手で顔を拭くと、どうやら蜘蛛の巣にでも引っかかったらしい。

なんという家だ。全く掃除が行き届いていない。若し灯りがあつたなら、この廊下はなんとも汚らしい姿を晒していたことだろう。

不快感と共に蜘蛛の巣を掃う。なかなか取れず、纏わり付いてくる。この間も蚊の声は止まない。寧ろ増えている。

二匹、いや三匹はいるだろうか。

更に悪いことに、蠅の飛ぶ音さえ聞こえる。

虫だ。

この家は、虫屋敷だ。

風が振動している。

廊下の奥から音が聞こえる。何の音だろう。

暗がりに目を細めていると、彼方から無数の蝶や蛾が飛んできた。

虫の群れが身体を掠める。時折、身体に衝突して床に落ちる音が聞こえる。翅が床に当たって立てる音が、虫たちの悲鳴に聞こえる。

蝶たちは一丸となって、廊下の奥を目指して飛ぶ。あの奥に何かあるのだろうか。

此処にいても何も始まらない。若しかすると、この家の主人がいるかも知れない。

急いで後を追う。一步踏み出す度に足の裏に奇妙な感触がある。裸足だったことに今気がついた。虫を踏んでいる。

団子虫や芋虫、毛虫、蟻にゴキブリ……

足と床の間で、無様に潰れる。

廊下の奥の部屋の扉は開いていた。

其処に先程の蝶や蛾は入っていった。

何かに誘われる様にその部屋を覗き込む。

部屋の中は矢張り薄暗い。八畳程の広さで、中央に丸い机と椅子が置かれている他は調度品がない。

椅子の上に、一人の少女が座っている。

全身が黒い、地味な色のワンピースを着ている。床まで垂らした長い黒髪は前髪も長く、彼女の左目を覆い隠している。月光を液体にして染めたかの様に白い肌が、この家では珍しく、目を引いた。

「何をそんなに慌てているの」

ほっそりとした声だった。見た目は十代の半ば位だが、若しかするとそれ以下かも知れないと思わせる幼い声だ。

「君はこの家の子かい？」

彼女の質問には答えずに、訊きたいことを告げた。

「そうよ」

「私は如何して此処に居る？」

「謎々は好きではないわ」

気だるそうに言葉を吐く少女。部屋の中には蝶や蠅が無数に飛び交っている。顔にぶつかって、ひどく不快だ。

「真面目に答えろッ」

つい大きな声を出してしまった。苛々する。小賢しく飛び交う虫の所為だろう。

「大声を出さないで頂戴」

机に頬杖をついて、少女は告げる。この少女は一体何者なのだろう。この先、いくら質問をしてもまとも返ってきそうにない。

ならばせめて此処から出して呉れ、と言おうとして一步踏み出した時、足の裏でまた虫を潰してしまった。

不快感が胎の底からせり上がる。虫を殺したからではない。少女の視線の所為だ。

虫を観察するかの如く、冷徹な瞳。ぞくっと、背筋が震えた。

「貴方は虫を殺し過ぎよ」

ひしひしと視線が突き刺さる。駄目だ。直視出来ない。何歳も下の子供なのに。何故。見られない。見たくない。厭だ。

「全く、本当に人間ってのは愚かね」

深く溜息をついて、少女は頭を振った。黒い髪の毛が、さらさらと揺れる。天の川が連想された。

気がつく、足元に夥しい数の虫がいた。蟻、芋虫、蛆虫、天道虫、螻蛄、飛蝗、蟋蟀、毛虫、玉虫……。

床が虫で埋め尽くされている。

「うわああッ！」

気味の悪さに、尻持ちをついた。べちゃり、と尻の下で沢山の命が消える。ぞわっという感触と共に、腕を虫たちが登り始める。目の前を無数の揚羽蝶が舞い、必死になって暴れると体中に蜘蛛の糸が絡みついた。

厭だ！

止めろ！

何だこれは！！

「何をそんなに慌てているの」

少女の声が響いた。虫に多い尽くされる視界の中で、妖艶に嗤っている。

「あははは、可笑しい人。そんなに虫が怖いのかしら……貴方が散々殺して回った虫たちが、そんなに怖いのかしら」

くつくつと嗤う。白い喉が綺麗だと思ったら、其処に一匹の芋虫が這っている。よくよく見ると、彼女の身体には無数の虫がへばり付いていた。

何なのだ、この女は。

狂っている。

少女は椅子からひよいと立ち上がると、こちらに近付いてくる。

こつこつと虫の居ない所を正確に歩いてくるのだ。長い髪が床を這う虫たちを優しく愛撫する。

伸ばされた白い手が頬に触れた。ひんやりと生気のない体温。

彼女は首を傾げて尋ねてくる。

「虫が怖いのかしら」

虫が怖いだって？

虫など、こんな小さな生き物など、何が怖いものか。

目で訴える。口の周りにはすでに沢山の虫たちが這っていて、到底開いて言葉を発する気にはなれない。不思議そうな顔で、彼女は嘲笑した。

「怖いのでしょうか。うふふ、貴方は、怖いのでしょうか」

少女はそう言うと、左目を隠していた前髪をすっと持ち上げた。

左目がある筈の場所に眼球はなく、暗い眼窩に蜘蛛の巣が張っている。

「貴方には罰を与えなくちゃ……でも、心配しないで……きっと虫が大好きになるわ」

その言葉が空気に溶け切る前に、彼女の左目の奥から無数の蝶が飛び出してきた。色は銀。青白く光る翅をはためかせ、勢い良く飛んでくる。銀の蝶は私の身体を一息に取り囲んだ。ばさばさと羽ばたく音が聞こえる。

思わず両目を塞ぐ。いつ止むとも解らぬ翅の音の中で、私は最後に見た少女の左目を思い出していた。

目が覚めた。此処は何処だろう。

頭上を見上げると、其処には巨大な人間がいた。

辺りには平凡な部屋の景色が広がっている。洋箏筈、机、ベッド……。

此処は“普通の”人間の部屋だ。

然し、どうにもサイズが大き過ぎる。

いや、気がつけば簡単なことだった。周りが大きいのではない。私が小さくなったのだ。

そして、ただ小さくなっただけではない。

体から生える六本の手足。黒い身体は到底人間のものではない。

私は虫になってしまったのだ。

此処は透明な壁と、青い色をした天井に囲まれている。

虫かご、という言葉が脳裏を掠める。

年端もいかない少年が、こちらを覗き込んでいる。

嗚呼、私は虫になったのだ。

そして、彼の手によってこの狭いかごに収容されたのだ。

此処は……。

ああ、此処は、虫屋敷だ。

私一人に此処は広過ぎる。

小さな虫けらにとっては、広過ぎるのだ。

虫屋敷に仲間が増えることを、心待ちにしているよ。

# 赤子

---

あれは、何だろう。

トン、トンと軽くノックする様に。

あれは……。

そうか。

あれは手だ。

赤子の様に小さな手形が窓硝子についている。

まさにそこに見えない赤ん坊がいて、トン、トン、と硝子を叩いているようだ。

薄黒く汚れた手形が無数に窓硝子を覆い、外に広がる夕暮れの景色を隠していく。

何なのだ。

一体、これは。

先程開けた、あの送り主不明の荷物がいけなかったのだろうか。

あれは一時間ほど前のことだ。

チャイムの音と共に宅急便が送られてきた。送り主は不明。怪訝に思いながらも、ずしっとした小包に少し期待した自分がいた。

何しろこちらは貧乏学生なのだ。実家から食糧が送られてきたのかも知れない。そう思ったのだ。

小包は小さくもないし、大きくもない、持ちやすい大きさだった。重さからすると米ではないだろう。ならば保存食の類か。

逸る気持ちを抑えて荷物を開けると、私は拍子抜けした。

小包の中には、何も入っていなかった。

段ボールの蓋を開けると、そこには和紙の様なものが敷き詰めてあるだけで、他には何もない。

送り主不明の荷物だ。当たり前だ。きっと私は何処かの誰かにからかわれたのだ。今頃、この荷物の送り主はほくそ笑んでいることだろう。食糧だと思ってわくわくしながら開ける私の顔を想像して。

余計にひもじい思いに浸る。取り敢えず荷物を片付けた。

やけに段ボールが軽く感じられた。

何だろう。

違和感がある。

まるで、あの蓋を開けた途端に、中から見えない何かが外に出て行ったかのような。

先程の重さが、何処かに行ってしまった。

あれから、一時間。

私の部屋の中に、何かがいる。

その何かは、今もトン、トン、と音を立てて窓硝子に手形をつけている。

それをじっと見ていると、いつしか硝子を叩く音が止んだ。

べた。

黒く汚れた小さな手の跡が、床についた。

五本の細い指は、私の足元を向いている。  
ぞわっと、何か得体の知れない恐怖が背中を駆ける。

ぺた。  
ぺた、ぺた。

本当にそこに赤ん坊がいるようだった。  
黒い手形が、床に付着する。  
それは徐々にこちらに近付いてくる。  
怖くて身動きが取れない。  
まずい。  
何がまずいのか、具体的には解らないが、本能がまずいと告げている。

ぺた、ぺた。

ぺたぺたぺたぺた。

手形の速度が上がる。  
その後ろには、まるで赤子が這った跡の様に、黒い道筋が出来ている。  
目には見えない赤子が近付く。  
手が。  
手形が、近付いてくる。  
厭だ。

ぺたぺたぺたぺたぺたぺたぺたッ！

「来るなあッ！」

黒い手の形が、足元にまで及びそうになった時、必死の思いで足を動かす。  
どうにか動いた右足で、目には見えない部分を蹴り上げる。

すると、私の足には柔らかい何かを蹴る感触があった。  
ぶしゅあっと、赤黒い液体が何もなかった場所から迸る。  
辺りにどろりとしたその液体が飛び散り、生々しい厭な音を立てて、何かが転がっていった。  
まるで母親の胎内からたった今出てきた様に。  
周囲は仄かに血の匂いがする。  
熱した錆びた鉄みたいな赤黒い池の中に転がるのは、赤子の様に小さい人間だ。  
赤子ではない。  
老熟した皺だらけの醜い顔。  
赤黒い、血の様な液体に塗れた、醜悪な身体。  
蹴られた衝撃の所為だろうか、左目が潰れていて、微かに開いた右目がこちらを向いている。

息を整えて、状況を整理する。  
私はこの奇妙な人間を殺してしまったのだろうか。  
否、これは人間ではない。  
化け物だ。  
化け物なのだ。

ゴミ袋を持ってきて、その奇妙な死体を押し込める。まだ暖かい。きっとこの赤黒い血の所為だ。血溜まりを綺麗に拭き取り、ゴミ袋は燃える日に出した。

これで大丈夫だ。

テレビのニュースでも赤ん坊の誘拐事件などは起きていない。

私は正常だ。

正常なのだ。

あの赤子の様な化け物が、非日常な存在だったのだ。そう思った。

それから数週間が経った。

チャイムの音で目が覚めた。

いけない。もう昼過ぎではないか。今日はレポートをやろうと思っていたのに。

玄関の扉を開けると、宅急便が届いていた。

「判子をお願いします」

配達員がにこやかに言う。

私は判子をきちっと捺してやり、荷物を受け取った。

小さすぎず、かといって大きすぎない、程良い大きさ。程良い重さ。

懐かしいこの重さに、私は諦めからふっと笑ってしまった。

「いつもご苦労様」

そう言うと、配達員は微かに笑った気がした。私を侮蔑するかの様に、口元だけが少しつり上がった。

あれから荷物はまだ開けていない。

小包の中からは時折、赤ん坊の泣き声が聞こえる。

だけれど、中はどうせ空っぽなのだ。透明な赤ん坊が入っているに違いない。

コウノトリは赤ん坊を運んでくるけれど、あの配達員は一体、何を運んでくるのだろうか。

今聞こえている泣き声が止んだら、ゴミ袋の用意だ。

明日は燃えるゴミの日だからね。

## プロポーズ

---

だったら今ここで死んで見せて、と彼女は言った。

「私の為ならなんでも出来る、のでしょうか？ だったら、私の為に死ぬことも出来るのよね」

小さな唇を歪ませて、彼女の澄んだ声が聞こえる。僕は今夜、彼女にプロポーズをすることにしていた。夜景が見える高級レストランでの食事に、彼女はとても喜んでいて。だから、きっと僕との結婚も快く承諾してくれると思ったのだ。

然し。

「で、でもさ、いくらなんでも、死ぬっていうのは……」

「へえ、出来ないんだ」

猫の様に愛らしい瞳が細くなる。彼女の視線はテーブルの上のナイフに注がれている。銀色に輝く殺意が、僕の背中に冷や汗を流させる。

ごくり、と生唾が喉を通過する音がやけに大きく響く。呼吸も荒くなる。

僕がナイフの輝きと、彼女の顔とを交互に見やり、逡巡していると、

「……ぷっ……はは、あははははっ！」

彼女は満面の笑みになった。笑顔は向日葵が咲いたみたいで、とても綺麗だ。

「ふふ、ははっ……ああ、お腹痛い。冗談に決まっているじゃない。本気にしちゃった？」

目元に浮かぶ雫を拭っても、まだ彼女は笑っている。僕の顔が真剣だったのがよほど面白かったのだろう。安堵の溜息が漏れる。良かった。彼女はやはり優しいんだ、と思った。プロポーズだなんて一世一代のことに緊張していた僕のことを、安心させようとして呉れたのだろう。

「はは、そうだよ、本当に死ぬはずないよね」

「そうよ、当たり前じゃない」

「でもさ、もし僕が君の為に死ぬ、なんて言ったらどうするの？」

僕の問いに、か細い声で、彼女は呟く。

「……そんなの私、泣いちゃうよ」

その目元にはまた、キラキラ光る雫が見えた。ナイフの冷たい輝きではない、温かい光だ。

僕の死ぬ場面でも想像しているのだろうか。だったら、なんと純真な心を持っているのだろうか。僕は本当に、一生を捧げる想いで彼女の為に生きようと、改めて思った。

僕は彼女を見つめる。

彼女も、僕に視線を向ける。

涙を拭うこともせずに、私の目をしっかりと見つめて、彼女は言う。

「きっと、泣いて喜んじゃうわ」

それも、とびっきりの笑顔で。

## 夜の視線

---

視線を感じる。

部屋の中には私しかいないはずだ。

いや、事実いないのだ。

夫の帰りは遅い。娘の桜は自分の部屋でもう寝ている。

つまり、リビングであるこの部屋には今、私しかいないのだ。

カチ、コチ、と時計が時を刻んでいく音が聞こえる。その音がやけに耳について、気になって仕方がない。

誰かに見られている。

そんな気がする。

勢いよく振り返って見ても、新調したばかりの白いカーテン、壁にかかる楕円形の鏡、先程からの音源である古い時計、ベージュ色のソファ、花の活けていない花瓶などがあるだけ。

ありふれた光景だ。

鏡の中でもう一人の私が見ている。

こちらを、見ている。

耐え切れなくなって視線を逸らす。テーブルの上に広げた小説に目を落とす。けれど、どうにも落ち着かない。時計の音が気になってしまう。

時計の音が――

カチ、コチ、カチ、コチ――――

ページに触れている指が震える。

如何してだろう。

いったい私は何に怯えているのだろうか。

解らない。

誰かに見られている。

もう一度、後ろを恐る恐る振り向いてみる。勿論、そこには誰もいない。でも、確かに視線は後ろから感じるのだ。

その時、私はあることに気がついた。

きちっと閉めたはずの純白のカーテンに隙間があった。その僅かな隙間から外の闇が見える。

まさか外から誰かに見られているのだろうか。

ぞわっと得体の知れない何かが背中を駆け上がる。正座した両脚が自分の身体ではなくなった様にした。

カーテンを閉めれば良いのだ。

そう思っても、身体は言うことを聞かない。時計の針の音だけが響く。

カチ、コチ、カチ、コチ……。

カーテンの隙間から、私は視線を外せなかった。恐怖はあった。けれど、一度視線を外すことの方がもっと怖かったのだ。

じりじりと時間は過ぎる。

冷や汗が頬を伝って、読みかけの小説のページを濡らす。

矢張り、見られている。

カーテンのかかった窓の横にかかる鏡に映った私の顔はとても青ざめている。

私は鏡を見るのが苦手だ。なんとも自分の顔を凝視していると不思議な気持ちになるからだ。自分を見られていることが厭なのかも知れない。たとえそれが自分自身にだとしても。

視線をカーテンの隙間に戻す。

うっすらと空いたその間が、ひどく怖い。急にそこに目玉などが現われたら、私は卒倒してしまうだろう。

それから何時間が過ぎたのか。

私には無限にも等しい時間を感じたが、実際には数分のことだったのだろう。夫の足音が聞こえたかと思うと、リビングの扉が開いた。いつもの優しい顔をした夫がそこにいた。

ようやく視線をカーテンから外せた私は、安堵と共に深い溜息をついた。

「如何したんだい、溜息なんかついて」

「それがね、誰かに見られている気がしたの。あすこのカーテンの隙間から」

「うん？ 隙間、ねえ……」

夫は軽く笑うとカーテンをぴっちり閉めた。これでもう恐怖は消えた。隙間は消えたのだ。

またひとつ溜息をつく。

そこで私は違和感を憶えた。

カーテン、ソファ、花瓶、時計。

鏡は……？

「まったく、君は昔から誰かに見られるのが厭だったね。だからこんな小さな隙間でも怖いのだろう？ 見られている気がして」

「……か、がみ……」

鏡は何処だ……。

鏡に映った自分の顔を思い出す。

鏡に映った自分は、私をじっと見つめていた。

それはそうだ。

他ならぬ私が見つめていたのだから。

だがそれは鏡を見た時の現象だ。

ならば、鏡は——

「鏡？ おかしなことを言うね。君が怖いからといってこの間、捨ててしまったんじゃないか」

鏡はこの部屋にはないよ。夫は普段と変わらぬ穏やかな口調でそう言った。

「今頃はきっと、あの鏡はバキバキに割られて、何処かのゴミ処理場の中さ。だから安心しなよ、さっきから震えがひどいけど……」

大丈夫かい、と心配する夫の声も遠い。

あるはずのないものが、この部屋にあったということか。

それともあれは私の恐怖が見せた、幻覚なのだろうか。

だとすると順序がおかしい。

私は視線を感じたからこそ、後ろを振り返り、あの鏡を発見したのだ。

ならばあの時感じた視線は、鏡の中に映った——

——私のものだということか。

その時、夫がいつそう明るい声で、

「そうだ、今夜は雪が降っているんだ！ 気晴らしにはちょうど良いと思うよ！」

そう言って、雪の様に白いカーテンをぱっと開いた。

大きな窓硝子があらわになる。

大きな——

私は悲鳴を上げることさえ出来なかった。

夜などの暗い場所では、光の反射によってうまく外の光が入ってこない為に、窓硝子が鏡のようになることが多々ある

。

けれど、今のこの状況は違う。  
違うと信じたかった。

私の目の前にある窓硝子には夥しい数の女の顔が映し出されていた。  
どれも無表情で。

虚ろな二つの瞳がついた顔が。  
こちらを見ている。

それは紛れもなく、私の顔だ。  
硝子が巨大な鏡となって、そこに映し出されている無数の私の顔がこちらを見つめているのだった。

朝の柔らかな光の中で、ボクは目を覚ました。

小屋から這いずり出すと、朝霧の向こうに太陽が昇ってきている。一日が始まる。ふうっと息を吸い込むと、爽やかな空気が肺に入ってきてなんとも気持ちが良い。

暫くすると、玄関の扉が音を立てて開いて、中からスーツをぴしりと着込んだ中年の男性と、黒く光るランドセルを背負った少年が出てくる。その後が続いて、淡いピンクのエプロンをつけたままの女性が現われた。

「では、行ってくるよ」

「行ってきまーす！」

スーツの男性が重々しく、ランドセルの少年が元気良く挨拶をしました。それを女性は微笑ましげに見つめ、行ってらっしゃい、と告げた。

彼らはボクが飼われている家の人たちだ。

少年の名前はサトル君だったか。まだこの家に来て一週間しか経っていないので、あまり実感が沸かないが、それでも彼らの家族に仲間入りしたのだと思う。

そんなことを思っていると、サトル君がこちらにやってきた。にやにやと粘っこい笑顔を携えて。

「今日は暑いから、水をかけて涼しくしてやるんだ」

そう言うと彼は手に持っていた水入りのペットボトルを逆さにして、ボクに水をかけた。びしゃっと透明な液体が体中にかかる。水はひどく冷たく、ボクは思わず吼えた。

「サトル、学校に遅刻するぞ」

サトル君のお父さん——先程のスーツを着た男性だ——がそう厳しい声で言うと、サトル君は、はい、と元気良く返事をした。人懐っこい笑顔でお父さんのもとまで歩いていく。

二人が歩いていく後ろ姿を見送ったサトル君のお母さんは、くるとボクの方を振り向いた。見下すような鋭い視線が痛い。ボクはきっとこの家族に嫌われているんだ。

家の中に消えたお母さんが少しすると手にトレイを持って現われた。トレイの中にはボクの為の餌が入っている。ドンっと中身が零れるのを構わずにお母さんがトレイを地面に落とした。

「全く、餌代も馬鹿にならないし、変な匂いはするし……なんで私がこいつの世話をしなくちゃいけないのかしら」

ぶつぶつと呟くお母さんの機嫌は悪そうだった。サトル君がボクを飼いたがったのだ。きっと両親の心境としてはペットなど飼いたくはなかったのだろう。トレイに顔をつけて食べていると、頭を上から踏まれた。餌の中に埋没するボクの顔。何も見えない。呼吸が出来なくて、苦しくて、ボクは必死になってもがいた。

「こら！ 暴れるんじゃないよ！ このッ！」

そう叫んだお母さんは、何度も何度もボクの頭を蹴った。鈍い音と共に衝撃がやってくる。視界がぶれて、小屋の傍へ転がって止まった。痛みに顔をしかめて起き上がると、お母さんはもうそこになかった。トレイも片付けられていた。あまり食べられなかったから、空腹感は強くなる一方だった。

夕方、サトル君が帰ってきた。友人たち数人を連れて。ボクは厭な予感がした。

そしてそれは的中した。

彼らはボクの周りを囲むと、石を投げたり、足で蹴ったり、ひどいやつは小便をかける者までいた。ぐしょぐしょに濡れたボクはひどくみすぼらしいだろう。匂いもひどいに違いない。サトル君の友達が帰る寸前、一番体格の良い少年がボクの腹に蹴りを入れた。息が出来なくなって、胃の中身が逆流した。それでも朝から殆ど何も食べていない所為か、粘つく胃液ばかりが喉の奥から溢れただけだった。口の周りをべたべたにしながら、必死に酸素を求めていると、左腕を踏まれた。大きくて強い力だった。ボクを踏んでいる大柄な子を囲んでいる子たちは、とても愉快そうに笑っている。サトル君も上機嫌だ。滲む視界の中で彼らの笑顔を見ていると、ぼきりという音がして左腕の骨が折れた。激しい痛みにボクは痛い、痛い、と吼えたが彼らには何も届きはしないだろう。

「五月蠅いんだよ！」

そう言ってボクの口をサトル君の真新しいスニーカーが蹴り上げる。口の中が切れて、血の味がした。

その夜、明かりの漏れる窓の中から談笑が聞こえた。サトル君の声もした。ボクはぼろぼろの状態に庭に転がっていた。それ以外、何もやる気が出ない。きっとこのままではボクは殺されてしまう。お店のショーウィンドウから出られた時には期待ばかりがあったけれど、もうそんなものは存在しなかった。

ボクは決意した。

この家を出よう。

この家から抜け出して、新しい生活を始めるんだ。幸い、首輪はつけられていない。

善は急げ、と思いボクは走り出した。門の鍵が締まっていて、なんとかして開けようと四苦八苦していると、玄関の中からサトル君が出てきた。音で気がついたのだろう。まずい、このまま捕まっては今すぐにでも殺されてしまう！

門の格子を決しの思いで飛び越えると、冷たい道路に出た。背後でサトル君の怒号が聞こえる。厭だ。逃げろ！ 逃げろ！

息を切らしてボクは逃げた。宛てのない夜の街を風のように走った。折れた左腕がずきずきと痛い。

暫く経って追っ手が来ないことを確認すると、ボクは膝に右手をついて肩で息をした。左手はまだ痛い。そんな時、後ろから声をかけられた。驚いたが、サトル君の声でないことはすぐに解ったので振り向いてみた。

そこには一人の女の子が立っていた。黒い髪は肩よりも長く、猫のような二つの瞳が宝石みたいにきらきらと輝いている。

「そんなに急いでどうしたのかしら？」

サトル君と同じ年か、それ以上か。それでも幼いことには変わらない。然し、大人びた声だった。猫の瞳が細められる。

「飼い主に殺されそうになったので、逃げていたのです」

ボクが正直に答えると、少女は薄く笑った。

「じゃあ、その怪我も飼い主にやられたのね、可哀想に……」

小さな歩幅で少女はこちらに近付いてくる。ほっそりした両腕を広げると、

「おいで、私の家に来て良いのよ」

にっこりと月の化身みたいに微笑んだ。さっと彼女の手が伸びて、ボクの髪の毛を無造作に掴んだ。そして、髪の毛を引っ張って歩き出す。

「ちょうど、飼っていたニンゲンが死んでしまったのよ……ニンゲンって案外脆いのね。あいつの濡らした手をコンセントに突き刺してやったの。そしたら真っ黒焦げになっちゃうんだもの。あはは、可笑的いよねえ……」

ぶちぶちとボクの髪が抜けるのもお構いなしに、少女は歩き続ける。心底楽しそうに。

「さあて、貴方はいつまで持つのか楽しみだわ♪ まさか感電くらいじゃ死なないわよね？」

悪魔の様に笑う少女は、ボクの身体をずるずると引きずっていく。ニンゲンの売買が始まってからこんなことは日常茶飯事だ。ボクは引きずられながら、漆黒の夜空を見上げた。そこには何もない。月は昇っていない。本当に、真っ暗なのだった。

## 少女と魔女

---

お城で豪華な舞踏会が催されています。時刻は夜の12時になろうとしています。もう5分もすれば、お城の大きな鐘が鳴り響いて一日の終わりを告げることでしょう。

ダンスホールの中心には、この国の王子様と、一人の少女が踊っています。

少女は白銀のドレスに身を包み、硝子で出来た靴を履いています。

そしてこれは、一日前の光景と全く一緒でした。何もかもが昨日の繰り返し。何故なら、時間が巻き戻ったのですから。

本当のところ、彼女はこの舞踏会に来ることを、お母さんとお姉さんにきつく禁止されていました。家に残って、暖炉の掃除をするように言いつけられていたのです。少女は厭な表情ひとつせず、それに頷きました。お母さんとお姉さんはお城のこの煌びやかな舞踏会に出かけるというにも拘わらず、です。二人が出かけたあと、少女は家で一人、せつせと懸命に掃除を始めました。それはそれは惨めで、暖炉の中の灰を目一杯に被って、さながら老婆の様な格好になってしまっていました。いつしか掃除の手が止まり、窓の外に浮かぶ銀色の三日月を眺めて、少女は呟きました。

「お母様もお姉様も酷いわ。私もお城の舞踏会に、一度で良いから行ってみたいわ」

その言葉があまりに痛切だったものですから、つつい私は声をかけたのだと思います。

「なら、貴女のその願い、叶えてあげましょう」

私がそう言うと、少女はこちらを振り向きました。暖炉の中に縮こまって、少し怯えた目で私を観察してきました。

「貴女は……魔女、ですか？」

「そうよ」

大きな三角帽子に不思議な形の杖を持っていれば、たいていの人は私が魔女であることに気がついて呉れます。

「貴女、お城の舞踏会に行きたいのでしょうか？」

少女は大きな瞳で、私を見つめ、それから首を縦に振りました。

私が魔法の杖を一振りして、彼女の為のドレスと靴を用意してあげました。勿論、お城に行く為の馬車と馬も、私の手にかかれば一瞬で用意出来るのでした。

少女は満面の笑みで、馬車に乗り込みました。闇の中でも白く輝くドレスの裾がはためきました。早くお城に行きたくてうずうずしている少女の背中に向かって、私は一言だけ忠告をしました。

「12時になると、魔法が解けてしまうからね。良いね、12時かつきりだからね。お城の鐘が12時を教える前に帰ってくるのよ」

解りました、と大声で言って、少女はお城に向かって馬車を走らせました。

それからは全く見ものでした。舞踏会には沢山の貴族や、貴婦人が出席していましたが、その中でもあの少女はひときわ目立っていたのです。着ているものは魔法で出したのですから当たり前として、その容姿も舞踏会の夜にはいっそう輝いていました。

そして、ついに王子様とダンスを踊ることになったのです。周囲でそれを眺めていた世の女性たちは羨望の眼差しで見つめていました。あの少女が笑顔で躍っているのを見て、私の心もひどく温かくなりました。

然し、楽しい時間というものはある間に過ぎていってしまいます。約束の12時になる5分前。少女は私の忠告を思い出したのか、急いで舞踏会の会場をあとにして走り出しました。お城は広いですが、あと5分もあれば馬車の停めるところまでは行ける筈です。

最後の長い階段を駆け下りている時、少女のドレスから真っ赤な林檎がひとつ零れ落ちて階段の上に転がりました。然し、少女はそれには気がつかず馬車のところまで駆け抜けました。無事、間に合ったようでした。

階段に落ちている林檎をあとから少女を追ってきていた王子様を見つけました。王子様に追いついた従者が、「それは、先程のお嬢さんのものでしょうな。王子へのプレゼントでございましょう」

王子様はふんふん、と頷いてその真っ赤に熟れた林檎を一口食べました。

「ああ、なんと甘く美味しい林檎だろう……よし、お前たち、さっきの少女を捜すのだ。僕はもう一度あの子に逢いたい。そして、この林檎のお礼を……」

そこまで言った王子様は血を吐いて階段を転がり落ちました。即死でした。清潔な白い階段が真っ赤に染まりました。林檎の様に真っ赤に染まりました。

その林檎はあの少女が、お母さんとお姉さんを殺そうと思って前々からひっそりと作っていた毒林檎だったのでした。そうとは知らずに、王子様は食べてしまったのです。

翌日、王子様の死因が判ると、国中に指名手配が出ました。あの少女を捜せ、というものです。然し、捜しても捜してもあの夜の綺麗な女性は見つかりませんでした。

少女は王子様が死んでしまったことをお母さんから聞かされました。少女自体はお城に行っていないことになっていましたから、容疑からは外れていたのです。王子様の死を聞いて、少女は嘆き悲しみました。

「そんな……ああ、そんな、なんてこと……私が肌身離さずに林檎を持っていたからだわ……あの日、家に置いてお城に行けば、こんなことにはならなかったのに……」

床掃除をしながら、少女は大粒の涙を流していました。その嗚咽が止まないうちに、私は再び彼女の前に姿を見せました。

「後悔しているのかしら」

「勿論よ。本当に、取り返しのつかないことをしてしまったの、私は……時間が元に戻らないのと同じで、失ったものはもう二度と手に入らないのよ」

真珠の様に綺麗な涙が、床を濡らします。少女はそこを何度も何度も雑巾で拭いていきますが、床掃除が終わる気配は当分なさそうです。

「だったら、時間を戻せば良いのよ」

気がついたら、私の口は動いていました。言葉にしてしまえば、案外あっさりとしたものです。

「……出来るの」

不安そうな彼女に、勇気を差し出す様に伝えます。

「ええ、私は魔女だからね」

少女は窓を見上げました。窓の外には、薄い雲がかかった青い空が広がっています。

視線を私に戻すと、彼女はただ一言、

「お願い、します」

と言った。もう彼女の涙は止まっていました。

そして、時間は今に戻るのでした。

夜の11時55分。ここまで時間を戻すのが精一杯でした。

でも、時間を逆戻りした少女は、王子様と優雅にダンスを踊っています。硝子の靴が床を踏む、コツコツという澄んだ音が、耳に優しいメロディーを奏でます。短い時間ですが、また一緒にダンスを踊れて良かった、と心から思います。

少女は涙を流していました。それに気づいた王子様は、

「どうしたの、泣いているの」

と尋ねました。それに応える様に、少女は潤んだ目を細めて、

「ええ、でも、これは嬉しさからの涙なのです。私は今、とても幸せな時間を過ごしています」

そう囁きました。

それでも、時間というものは無情で、二人の仲を引き裂く様に、刻一刻と短くなっていきます。12時になるとドレスの魔法は解けてしまいます。勿論、それは彼女を有頂天にさせない為にした細工なので、この『時間が戻る魔法』まで

解けてしまうわけではありません。それだと、あんまりにもあの少女が可哀想ですから。

少女は時計を見ると、昨夜と同じ様に走り出しました。勿論、今日は林檎を落とさないように注意しながら。懸命に、少女は走りました。最後の大階段も必死に走っていきます。私は心の奥で、頑張れ、と彼女に声援を送りました。魔法を使えば一発で馬車のところまで行くことができます。でも、それだとあの子の為にはならないと思うのです。彼女の必死な姿を見ると、人間も良いものだな、などと思います。

もう一息で階段も終わりというところで、硝子の靴の片方が脱げてしまいました。それでも、彼女は後ろを振り返らずに馬車の停めてあるところまで駆けたのです。それを見て、私はほっと胸を撫で下ろしました。

少女が家に到着した頃、お城の12時の鐘が鳴り響きました。魔法が解ける瞬間が来たのです。綺麗なドレスも馬車も、硝子の靴も全て空気に溶けて消えました。きっとお城に忘れてきた硝子の靴も、消えてしまったことでしょう。

「良かったわね」

ドレスの魔法がすっかり解けて、今はみすぼらしい姿になってしまった少女に、私は言いました。

「ええ、本当に有難う。こんなに幸せことってないわ」

少女は笑顔で答えます。姿勢は汚らしくても、心は本当に綺麗なのだ、と思います。そして、懐から真っ赤なあの林檎を取り出して言いました。

「本当に良かったわ、この毒林檎が戻ってきて！ もう一度作るにはお金も時間もかかるしね。それに、殺傷能力は王子様で実践済みなもの！ あはは、あの二人の馬鹿な顔が苦痛に歪むのが目に浮かぶわあ！ そうだ、さっきの言葉、訂正しなくちゃいけないわね。きっと一番幸せなことは、お母様とお姉様が無様に死ぬことね！ あははは……」

口が裂けそうなほどの笑顔で、少女はもう一度、私にお礼を言って家の中へと入って行きました。彼女がいなくなったあとも、夜の中に輝いていた赤い林檎が、いつまでも目の奥に焼きついて離れないのです。

鬱蒼と茂る森の中を、両親に連れられた兄妹が歩いておりました。

兄妹は毎日の様に両親からひどい虐待を受けて苦しんでおりました。そんな折に、こうして森の中へと連れて来られたのでした。

黙って着いてきなさい、という父親の言葉に従順に頷いた兄妹なのでした。

木々の葉の隙間から漏れ出る日光が、ひと際少なくなった頃合いです。両親は二人の子供に、ここで少し待っていなさい、と軽く命令をして、大股でもと来た道を歩いていってしまいました。

兄妹は大人しく両親の帰りを待っておりましたが、太陽が山の稜線にかかる時分になっても戻ってこないことに途轍もなく不安になってしまいました。

日も暮れかけ、空腹も限界になっていた時でした。

二人の兄妹はどこからともなく漂ってくる甘い匂いの存在に気がつきました。

もう二人とも意識も半ば朦朧となって、匂いのする方へと遮二無二足を動かしたのでした。

するとどうでしょう。森の中に、一軒の家がありました。

窓からは明かりが漏れていて、やはり甘い匂いはその家から漂ってきているのでした。

何故なら、その家はあらゆる部分がお菓子で造られていたからです。茶色の扉は甘いチョコレート、壁は芳ばしい匂いのウエハース、窓硝子は透明な飴細工……その他様々な細部にまでお菓子で拵えてありました。

二人の兄妹は腹の音に後押しされる様にその家へと近づいていきました。目の前には巨大なお菓子の家が建っていて、一瞬彼らが森の中にいるということを忘れてしまっているかの様でした。

二人がお菓子の家の前で、中に入ってみようかと逡巡していると、チョコレートの扉がおもむろに開きました。中から一人の老婆が現れてこう言いました。

「なんだい、もう日が暮れるっていう時分に。迷子かや？」

その言葉に二人はひどく安堵して、ふとお腹の虫が大きな音を立てて鳴きました。

それを聞いた老婆はくすりと笑うと、笑顔で二人の兄妹をお菓子の家へと招き入れました。

お菓子の家の中は勿論、部屋の調度品から何から全てがお菓子で造られておりました。それを見て二人はもう夢の中にでもいるような心持ちになっている様でした。

椅子に座って待っていた兄妹の前に、大きなお皿が出てきました。老婆が盛り付けたお菓子の山でした。今の二人にとってはまるで宝の山の様に映っていることでしょう。少し戸惑っていた二人でしたが、老婆が優しく促すと堰を切った様に目の前の宝の山を切り崩しにかかりました。

数分後、二人は寝息を立ててテーブルに突っ伏しておりました。お腹が膨れて眠くなったのかと思われましたが、なんと、あの老婆がお菓子の睡魔の魔法をかけていたのです。

そう、あの優しそうな老婆は何を隠そう、たいそう腕の立つ魔女なのでした。このお菓子の家も魔法で拵えたもので、二人の幼い人間の子を誘き出す為の罠だったのです。そんなこととは露知らずに眠りこける兄妹は、まだ眠りから覚めそうにはありません。

さて、二人を眠らせた魔女は魔法で以って幼い二人の体を宙に浮かべると、そのまま奥の部屋へと閉じ込めてしまいました。きっと、明日の朝には二人は魔女に食べられてしまうのでしょうか。もしかすると、まるまる太らせてから食べるという手もありますが、それは魔女にしか解らないのです。

翌日、お菓子の家の中には熱く煮えたぎった熱湯の入った大釜が用意されておりました。恐らく、幼い兄妹はあの湯の中に入れられて魔法の材料にでもされてしまうのでしょうか。

そう考えるとあの二人がひどく可哀想に思えてしまいます。

やがて、奥の部屋から二人の兄妹が出てきました。両手が背中中に回されていて、恐らく手の自由が奪われているの

でしょう。魔女は嫌がる妹をぐつぐつと煮える大釜の前に立たせました。まずは少女から、ということなのでしょう。必死に抵抗する少女でしたが、魔女の魔法でやりこまれ、熱湯にその顔がつきそうになりました。

とその時です！

後ろから兄の少年がえいや、とばかりに魔女に渾身の体当たりを喰らわせたのでした。

いくら魔法を使うといえども、肉体はあくまで老婆。少年の力に負けて、大釜に頭から突っ込んでしまいました。その時の魔女の悲鳴といったら地の果てまで届くのではないかと、思うほど大きく響きました。

魔女はすぐさま自分の身体を真っ黒なカラスに変えて、大釜の熱湯から飛び出しました。そして、兄妹には目も呉れずに飴細工の窓から飛び去ってしまいました。その黒い影はすぐに青い空の何処にも見えなくなりました。

二人の兄妹は魔女をやっつけたことを喜びました。これで家に帰ることが出来ます。

然し、二人は余り家には帰りたくなさそうなのでした。それもその筈でしょう。家に戻っても両親に冷たくされるのは目に見えていますから。あの家に二人の居場所などなかったのです。

「兄さん、私おうちに帰りたくないわ」

「僕もだよ。如何だろう、このお菓子の家で暮らすというのは。いつでもお菓子を食べられるぞ」

「まあ、それはとても素敵なお考えね」

二人は久しぶりに心の底から笑い合ったのでした。

それからというもの、二人はお菓子の家の中にあるお菓子を食べて過ごしました。それでも、この世に無限など存在しない様に、家の中はすぐに空っぽになってしまいました。

困った二人は仕方がないので少しずつ家の壁を食べることにしました。内側の壁はさくさくのクッキーで出来ていて、ちょっぴり喉が渇きそうでした。

それでも何日かが経過すると家の壁には大きな穴が開いていました。クッキーの内壁とウエハースの外壁は見事に兄妹に食べつくされて、家の中が丸見えになってしまっています。

数日後には、兄妹はチョコレートで出来た扉に取り掛かかっておりました。口の周りが茶褐色の甘さに塗れてしまっています。兄の口の周りについたチョコレートを、妹がそっと拭きあげて二人して可笑しそうに笑っておりました。

そして、魔女がいなくなってから一月程が経ちますと、遂にお菓子の家は跡形もなくなっていました。

二人の兄妹はまた空腹に苦しめられておりました。

もう何処を捜してもお菓子は影も形もありませんでした。

然し、二人は薄々と気がつき始めておりました。お菓子の家がなくなっても拘らず、何処からか甘い匂いが漂ってきていることに。そしてその匂いが、自分自身の身体から発されていることに。

少年は自分の指をべろりと舐めてみました。すると如何でしょう。余程甘かったのでしょうか、頬が緩んでしまっています。

最初の内、少年は自分の指に砂糖でも付いていたのかと考えている様でしたが、やがて得心いったらしく、誇らしげにこう言いました。

「すごいや、僕の指がお菓子になったぞ」

「まあ、本当ですか兄さん」

妹が兄に不思議そうに尋ねました。それでも、妹の鼻にも甘い匂いは届いている筈なのです。

「そうだよ。きっとお菓子ばかり食べていたからだろう」

「じゃあ、もしかすると私も……」

そう言うと、妹は自分の指を小さな舌で舐めてみました。そして、頬を綻ばせて自分の指が甘くなっていることに気がついた様でした。

「すごいわ、兄さん。私たちがお菓子になっちゃったのね！」

「きっと、お菓子が好きな僕らへの神様からのプレゼントだよ」

「すごいわすごいわ！ ああ神様、有難う御座います」

興奮冷めやらぬ様子の妹は兄を見上げて、言いました。

「どうか、兄さん。私の指をお食べになって下さいな。お腹がお空きなのでしょう」

初め戸惑っていた少年も、やがて空腹に負けたのか差し出された少女の右手の人差し指をおずおずと口に咥え、それ

から一思いに噛み千切りました。

咀嚼を終えて妹の指を飲み込んだ少年が、

「とても甘くて美味しいよ。まるでマシュマロみたいだ。それに中にはチョコレートが入っているのかな。甘いのが染み出してくるよ」

「嬉しいですね、兄さん。そう言って戴けて……それに私、ちっとも痛くなどないのです」

「きっとお菓子になったからだろうねえ。ほうら、血も出ていないじゃないか」

「兄さん、私も、兄さんのが……その……」

少女は物欲しそうな目で兄を見上げて言います。少年は笑顔でそれに応じ、自分の指を差し出しました。少女は両手で兄の手を持ち、その小さな唇で少年の指を包み込みました。そして口を離れた時にはもう指の先が無くなってしまっているのです。もぐもぐと少女の口が動いておりました。お互いに体の一部を失ったというのに、全く痛そうではありません。ごくんと兄の一部を飲み終えた妹が言います。

「兄さん、もっと、もっと私の身体を食べて下さい」

その言葉を聞いた少年は、妹の手首に噛り付きました。口の開閉と連動して少女の肉体が少年の中へと納まっていきます。

「兄さん、私も……」

そう言うなり少女は兄と抱き合う様にして、右肩に齧り付きました。辺りにはくちやくちやくと互いの身体を咀嚼する音が響いています。きっと彼らには、周囲に充満する甘い匂いが嗅ぎ取れていたことでしょう。

「ふふっ、兄さんたら、そんなに慌てて。よっぽどお腹が空いていらしのですねえ……私の右手、もう殆ど残っていないじゃありませんか……それに、お口の周りがチョコレートでべとべとですわ」

「ご免よ、だって余りにも美味しくくて……それに、君だって口の周りがチョコレートまみれじゃないか」

「うふふ、だってとってても美味しいのですもの。兄さん、もっと頂戴しますね」

指、手首、腕、次いで足と二人の食欲が暴れ回ります。

「本当に甘くて美味しいよ。マシュマロと言うよりもプリンに近いかな」

「ああ、兄さんの身体、とても柔らかくて美味しいです」

最早会話も成り立たなくなり、互いに感想を吐きながら口を動かしていきます。言葉を発することよりも、口の中を食べ物で満たしたいという思いがあるのでしょうか。

二人の奇妙な晚餐は、日が暮れて周りの景色が漆黒に塗りつぶされるまで続きました。そして、当の二人は満腹になったことで今は眠りについております。

二人の小さな身体が森の中で小さく絡まりあって、闇に溶けていきました。

翌日、太陽が顔を出してから少し経って、二人を見つけた木こりが大勢の村人を呼んできました。勿論、そこには二人の両親の姿もありました。両親は子供たちの変わり果てた姿にただひたすら驚いていたのでした。

大勢の人々に囲まれた二人の幼い兄妹の身体は、頭部からお腹にかけての部分しか残っておりませんでした。本来手足がある筈の場所には申し訳程度の肉片しか残っておりません。互いに寄り添う形で、二つの命は果てておりました。

辺りには夥しい量の血。今は時間が経過した為か、夜の闇の様な暗い赤色です。

そして、二人の口の周りにべっとりと付いた、最早どちらのものなのか判然としないチョコレート色の血液。恍惚な表情の二人は、今にも動き出しそうでした。

村の偉い学者さんが口を開きます。

「きっと、この子たちは余りの空腹に幻覚を見ていたのでしょう。だから互いの身体を食べてしまった。それも食べる為の口と、消化する為の胃を残して。大方、自分たちの身体が甘いお菓子にでもなってしまった、と考えてね」

「そんなことが、あり得るのかい？」

「いくらなんでも……それにこの血の量だぞ。痛みもあつた筈だ」

周りの人々は思い思いの意見を言いますが、偉い学者さんは凛として答えます。

「強い幻覚の前では、痛覚も麻痺してしまうのです」

その偉い学者さんが語ったことは本当です。何故なら、二人の兄妹は昨晚、実際に大量の血を撒き散らしながら、そ

れでも痛みを感じていない様子で互いの身体を食べたのですから。

兄弟を取り囲む人々はお葬式のことなどについて難しい顔であれこれと話し合っております。

誰も兄妹の身体に注目していない今がチャンスです。

人間の子供の眼球はとても美味である、という同胞からの情報を信じてずっと待っていた甲斐がありました。ぞくぞくと腹の底から湧き上がってくる食欲。

渴ききった血溜まりに寄り添う子供たちの眼球を目掛けて、私は枝の上から空中へと舞い上がり翼をはためかせるのでした。

私は仲間内で誰よりもグルメなのです。

## 彼女の顔

---

「今度、整形することにしたわ」

誰が、と問わずともその言葉の主語が言い放った本人であることはすぐに理解出来た。でも、彼女の意見に対して、僕は反論した。

ご両親から貰った自分の顔を大切にしなきゃ、というありきたりな台詞で。

それに、愛する人の顔を何処の誰とも解らない整形外科医に弄られるのも気に入らない、という我が儘な台詞は飲み込んで。

「でも、整形すればもう私はこの顔のことでとやかく言われることはなくなるわ」

彼女は前々から自分の顔にコンプレックスを抱いていた。よく顔のことを他者からからかわれるらしい。曰く、不細工である、と。

僕から見れば彼女の顔は不細工ではない。寧ろ整っている方だとも思う。自分の恋人だから、多分に主観が入り交じっているのは悪しからず。

でも、鼻屑なしに彼女は凛とした顔立ちをしている。僕が思うに、不細工と言われるのは単なる羨望なのではないか。

君はそのままでも十分綺麗だけどな、と言っても僕の言葉に力が無いのは解っている。

整形をする、と彼女が決めたからには仕方がない。僕にはそれを止める権利はない。彼女が自分で決めたのだからそれで良い。

結局、最後に折れたのは僕だった。

彼女は笑顔で、

「ありがとう。来週には私は生まれ変わるわ」

そう言うと、ホームに滑り込んできた電車で飛び乗った。ドアが閉まり、電車が発車すると同時にこちらを振り向く。

「期待していて頂戴」

形の良い口の動きがそう告げていた。

あれから丁度一週間が経過した。

整形手術は上手くいっただろうか。

もうすぐ日も暮れる。彼女のことが心配で、一人部屋の中をぐるぐると歩き回ってしまう。

すると、携帯電話が震えた。彼女からのメールだった。

『今からうちに来れるかしら？ 整形後の素晴らしい私に逢えるわよ』

顔文字も絵文字もない、いつも通りの素っ気ない文面に、ふと笑顔になる。

返信の文面を考えながら、財布を持って僕は家を出た。

彼女の家までは電車で40分程。もうすっかり太陽の姿は空になく、小さな星が競う様に輝いている。

インターホンを鳴らすと彼女が現れる代わりにメールが届いた。彼女からだ。

『開いているから、入って来て良いわよ』

怪訝に思い乍らもドアノブを回す。ひんやりとしたノブが、夜の寒さを思い出させる。

中は電気がついておらず、真っ暗だ。手探りで部屋まで進み、電気のスイッチを押す。すぐさま部屋が明るく照らし出される。

ベッドに彼女が腰掛けていた。

いや、正確には“頭部のない”彼女の身体がちょこんと座っていた。

言葉を失った。

一体これはどういうことだ。

その時、僕の携帯電話が震える。ぶるぶると何かに怯える様に。

メールが届いていた。

『どうかしら、綺麗になったでしょう？ これでもう顔のことで誰からもとやかく言われることはなくなるわ』

このメールは彼女からなのだろうか？

ふと目線を下げると、ベッドに座る彼女の指が忙しく蠢いている。手に持った携帯電話にメールの文章を打っているのだ。

『ねえ、私綺麗になったかしら？』

首から上はもう何もない。丸く切り取られた首からは、血が滲んでいる。

『腕の良い先生だったから、痛くもなくて良い気分よ』

メールが次々と届く。

『貴方も嬉しいでしょう？ 顔が不細工な女が恋人じゃ厭だった筈よ』

話す為の口がないから、こうしてメールで会話しているのだろう。

『ねえ、何か言ってよ。私は綺麗になる為にこんなにも頑張ったのに』

口で言っても耳のない彼女には、僕の言葉は届かない。

『綺麗だよ。そして愛してる』

僕は彼女にメールでそう告げると、より一層美しくなった彼女を抱き締めた。

その夏、僕らはめでたく結婚した。

誓いのキスの時に戸惑ってしまった僕は、出席者は勿論、初老の神父にも笑われてしまった。

今となっては良い思い出だけれどね。

夜の公園。

風の音。

月の光。

消えかけの街灯。

モノクロの世界。

そこに一人の少女が立っていた。

闇にぼうっと浮かぶ白色のワンピースを着た少女が一人、公園の真ん中に立っていた。

今宵の月は、三日月。

風が時折吹いて、周囲の木々を揺らす。ざあざあと音が跳ねる。

腰まである黒い髪の毛が、風に遊ばれて夜に舞う。

少女のほっそりとした指は、真っ赤な血で濡れていた。今もぽたぽたと血が滴り落ちている。

それは彼女の血ではない。

その血は、少女の指先に掴まれた眼球の持ち主のものだ。

眼球の持ち主は、少女の足元に転がっている。

浅く呼吸はしている。死んではないようだ。

だが、眼球をくり抜かれた痛みと衝撃に気絶してしまったようだった。

少女は月明かりに、今しがた手に入れた眼球をかざして観察する。

有名な鑑定士の様に、まじまじと観察している。

それは彼女の眼に合うかどうかを見ているのだった。

少女の左目は、見事に何も嵌っておらず、可愛らしい右目が忙しなく動いて、薄暗い中で眼球をじっくりと見ている

やがて、緩慢な動作でその血まみれの眼球を自分の左の眼窩に押し入れた。

然し、上手く嵌らないようだ。

眼球が大きすぎて、それでも彼女は無理矢理に捻じ込むものだから、眼球が壊れてしまって中からどろりと透明な液体が溢れ出した。

どろどろと液体が彼女の頬を伝う。舌でぺろりと舐め取った。

採取した眼球が自分に合わなかったということが解ると、彼女は、

「また、はずれかあ……」

と元気なさそうに呟いた。

手の中でぐちゃぐちゃに潰れた眼球をぼいと投げ捨てると、彼女はそのままふらふらと歩き出す。

もうあの眼球には興味がないようだった。

ゆらゆら、ふらふらと、夜中に因数分解をする蝶々みたいな動きで、公園の中を歩く。

倒れている人間は、まだ目が覚める様子はない。

左目を失ったあの人間は、このあと如何するのだろうか。

あの少女みたいに夜の街を彷徨うのだろうか。

それとも、左目を失ったショックに泣き叫んで死んでいくのだろうか。

少女の足音が近く聞こえる。

気がつけば、少女は僕が隠れていた草むらのすぐ近くにまで歩いてきていた。

まずい。

心拍数が上がる。

このままでは見つかってしまう。

息を殺してじっと待つ。

どうか、彼女に気がつかれませんかように。

然し、こつこつと少女の歩く音が、どんどん迫ってくる。

がさつと草むらを掻き分ける音も聞こえる。

まずい。

目の前の草むらがゆっくりと、左右に押し広げられる。

少女の幼い顔が闇に浮かび上がった。

漆黒に染まる左の窪み。

狂気を孕んだ右の瞳。

僕と目が合う。

彼女はこちらを見て、ゆっくりと微笑んで言う。

「私の眼を知らないかしら？」

「し、知りません！」

怖さのあまり、思わず声を上げてしまった。

くすくすと、心の底から可笑しそうに少女は笑う。

しまった。

声を出したものだから、本当にばれてしまったのか。

少女の細い指が、こちらに伸びてくる。

厭だ。

まずい。

そうは思っても彼女の指が伸びてくるのが速くて、僕はぐっと驚掴みにされた。

「嘘は駄目よ……」

優しく、子守唄でも歌うかの様に囁く。

「貴方は、私の大切な眼なのだから」

そう言うと、彼女は僕を左の眼窩に押し込んだ。

すんなりとそこに納まる、僕の身体。

せっかくの夜だから抜け出したっていうのに、またこの窮屈な生活に逆戻りだ。

厭だ、厭だ。

仕方ないので抜け出すのを諦める。そして、試しに訊いてみた。

「これから、如何するんですか？」

本当はまだ帰りたくはない。

もう少しだけ夜風に浴びて、自由を満喫していたかった。

それでも、僕の気持ちなんかお構いなしに、少女は三日月を見上げて呟いた。

「すぐに家に帰るわよ……手が汚れてしまったもの」

乾燥した血で染まった少女の手は、それでもひどく美しく、僕は無言で家路につくことにした。

困ったご主人様だよ、まったく。

# 家(1)

---

窓の外には、いつもと変わらない空が、青い両腕を広げている。

埃の付着した窓硝子はもう何年も掃除されていない。指の先で表面をなぞると、窓に綺麗な円が書けた。丸い穴から外に抜け出す自分をひっそりと想像する。指にこんもりついた埃を服で拭いて、私はまたベッドの上にごろんと転がった。

退屈だ。

夜までお父さんもお母さんも帰っては来ない。三人暮らしの私にとって、両親のいない日中は一日のうちで最も暇な時間。家の中にある本は全て読んでしまったし、他にやることなんかない。退屈しのぎに外を眺めても、ちっとも面白くない。昨日と変わらない、この家の二階からの街の景色。何度も何度も見た景色。まばらに背の高いビルが立っている。味気ない風景が、窓枠に切り取られているだけ。

でも、そこにはあるのは、私の知らない世界。

生まれてからずっと、私はこの家の中で暮らしてきた。一步も外になど出たことがない。

この国の子供はみんな、学校に行かなくてはならないらしい。正確には、保護者にその義務があって、子供には学校に通う権利がある、らしい。お父さんの書斎にある本で、そのことを知った。

でも、私は学校に行かせては貰えず、独りで毎日を過ごしている。

退屈の所為で読書ばかりしていたので、人並みに知識は持っていると思う。平仮名も片仮名も、アルファベットだって書ける。漢字はまだ知らない字もあるけれど。

学校に行きたいとも、外に出たいとも思わない。

この家の中で、お父さんとお母さんと生きていければ、それで良いのだ。

もしかすると、私の家はおかしいのかも知れない。普通とは違うのかも知れない。でも、私はお父さんのこともお母さんのことも愛していたし、二人も私のことを愛して呉れる。

それさえあれば十分だ。

窓から部屋の中に視線を移す。分厚い本や割れたお皿、汚れきったぬいぐるみが多数、床に散乱している。足の踏み場なんかない。くたびれたテディベアが、こちらを向いてうな垂れている。左腕がもげていて、格好が悪い。

家の床は基本的にこんな有り様。廊下にも沢山のものが溢れかえっている。割れた硝子の破片を踏んづけて、足から血を流したことがあった。それ以来、家の中でも靴を履いて良いことになった。靴なんて履くのは生まれて初めてのことであったので大いに喜んだ。嬉しさのあまり飛び上がったら、足の傷が悲鳴を上げたっけ。

生まれて初めての靴は、お母さんが選んで呉れたという黒いエナメルの小さな靴。その漆黒の輝きは、とても綺麗だった。靴の表面に私の顔が映るくらいに綺麗だったのだ。一方、そこに映る私の顔は前髪が両目どころか鼻も隠してしまっていて、なんだかとても不細工だった。自分の顔を見るのは久しぶりだった。家の中に鏡はない。全て割れてしまったからないのだ。

視線が宙を彷徨う。退屈過ぎて思考も安定しない。ふらふらふらふら。あっちにいたりこっちにいたり。ひどく不安定な気分。

部屋の中も特に変わったことはなかった。残念。

夜。

両親の帰宅は、家の中の空気が変わることで知ることが出来る。

密閉されていた屋内の空気と、外の世界からの空気が複雑に混じり合うのだ。

外の匂いを、私は嫌いじゃない。今は秋で仄かに涼しい。匂いもなんだかそんな感じ。

お父さんとお母さんはいつも一緒に帰ってくる。二人とも違う会社に勤めているのに、こうして同じ時間に帰ってくるというのは、本当に仲が良いことなのだなとつくづく思う。

自分の部屋を出て、一階に向かう。

お母さんはやけに上機嫌に、すぐにお夕飯を作るから、と言って台所に向かった。その後ろ姿を見るだけで、待たされていた時間が一瞬にしてなかったことになる気分だった。

私とお父さんは台所にある長机について、大人しくしていた。

お父さんが、今日は何をしていたんだい、と尋ねてきた。これはいつものこと。毎日繰り返される、反復作業。

ご本を読んでいたの、と私が答えると、お父さんは満足そうに笑顔で頷いた。

これもいつも通り。毎日の通過儀礼の様に、私は同じ解答をする。お父さんの笑顔もいつも通り。

会話が終わると、部屋にはお母さんが料理をする美味しそうな音が響いていく。朝ご飯を食べてから何も口にしていないので、お腹がぺこぺこだった。前に読んだ小説には、お昼にご飯を食べる、という習慣が書かれていた。羨ましいなあ、と思った覚えがある。

今日の献立も、白いご飯とお味噌汁、それと胡瓜の漬物。お父さんとお母さんは大人なので、お肉を食べられる。私はいつも一緒に献立。勿論、お肉は大人になってからしか食べてはいけない。よく物語の中で子供たちがお肉を食べている場面があるけれど、あれはひどく野蛮で、子供のくせに生意気な行為なのだと教わった。それに、毎日違ったものを食べる人たちがいるらしい。それも本を読んで知った。世界は広いんだなあ、と感じた。私はご飯とお味噌汁と胡瓜の味しか知らない。大人になったら、好き嫌いしないようにしないと。お肉だって食べなくちゃ。そう胸に誓った。

毎週金曜日になると、お父さんは食事のあとにお酒を飲む。とくとくとコップから溢れそうになるまでお酒を注ぐ。コップの口にはふるふると盛り上がった液面が震えている。確か、表面張力という力が働いているのだ。

お酒は大人しか飲んではいけないそうだ。これはお肉と同じ。でも、お母さんが飲んでいるところをまだ見たことがない。好き嫌いがあるのかも知れない。私が飲める様になるには、まだまだ先のことだろうけれど。

お酒を飲んだお父さんは、いつもより饒舌になり、いつもより暴力的になるのだった。

だから私は食事が済むとすぐに自分の部屋に駆け上がらなければならなかった。

階下で鈍い音と何かが砕けた音とお母さんの悲鳴が上がった。これもいつものこと。私は自分の部屋で退屈と闘う。家の中が静かになれば、それはお風呂に入る合図。今日は音が止むのが早かった。

お風呂は好きだ。温かいお湯に身体を包まれると、それはもう本当に気持ちが良い。ぼかぼかと身体だけじゃなくて心まで温かくなる。

長い髪を洗うのは一苦労だ。どうしても毛先がお風呂のタイルについてしまう。洗っても汚れてしまう。それはまるで私たちそのものみたいだった。洗うのが面倒でも、私たち子供は働きもしないで毎日ご飯を食べられるのだから、これくらいで弱音を吐いてはいけない。お父さんもお母さんも毎日の様に仕事をしていて疲れているのだから。

お風呂から上がると、先程まで着ていた自分の服を再度着る。自分の服は一週間に一度、日曜日のお昼に洗う。その時、私は毛布に包まって、怠惰な午後を愉しむ。ところどころほつれた毛布に包まってまどろんでいると、まるで世界が終わってしまったかの様に感じることもある。生き残ったのは自分だけ。そんな世界の終末を頭に思い描く。

勿論、世界が終わるなんてことはちっともなく、無事に終わるのは洗濯だけだ。

この服は五年前にお母さんが買ってきたものだ。フリフリのレースが沢山ついている、黒と白を基調としたドレスだ。カチューシャやドロワーズと一緒に買って貰ったのだ。これを着た私を見て、お父さんもお母さんもそれはそれは褒めてくれた。可愛い可愛いと言われたのだ。それがなんだかとても嬉しくて、それ以来私はずっとこの服を着ている。正しくは、この服しか持っていないのだけれど。五年前の服なので、あちこちがきつい。このドレスは身体の成長を制限するかの様に、毎日ぎちぎちと締め付けてくる。

実を言うと、あの黒い靴も初めて買って貰った日からずっと履いている。最近ではもう足の指が悲鳴を上げる程にまできつくなってしまった。それでも、私はきつとこの靴を履き続けるだろう。靴が私に合わせるのではなく、私が靴に合わせるのだ。だって、初めての靴だから。ぴかぴかと黒くて、私だけの靴なのだから。

お風呂から上がって、自分の部屋に戻ると、もう寝なくてははいけない時間だ。子供は夜更かししてはいけない。眠らないと背が伸びない。つまり、大人になれないのだ。

寝る前にふと、昼間に描いた円から窓の外を見ると、真っ暗の闇の中に小さく光る二つの点が揺れていた。何だろう？

目を放した際に、その光は消えていた。結局、その光の正体は何なのか解らないまま、眠りについた。

その日の夢は、夕日の中、誰もいない曲がり角で風船を膨らませる、というものだった。風船で遊んだことのない私には、とても楽しい夢だった。

## 家(2)

---

ある日のこと。

朝ご飯を食べ、お父さんとお母さんのお見送りを済ませると、私にはもうすることがない。今日も退屈な一日が始まる。そう考えていると、この前の夜、眠る前に見た二つの光について思い出した。

あれは一体何だったのだろうか。

部屋の窓からもう一度、外を覗いてみた。光が揺れていた辺りを見してみる。丈の長い草が無造作に生えた場所だ。

そこには、一匹の生き物がいた。何だろう、あれは。

お父さんの書斎に行き、動物図鑑を手に自室に戻る。久々に走ったから息が切れる。頁を捲る指が震える。急げ、急げ。

途中の頁で私の手と視線は止まった。外にいた生き物は、猫という生き物らしい。黒い身体なので黒猫とでも言うべきか。

あれが黒猫かあ、と思い、もう一度窓の外を見してみる。黒猫もこちらを見ている。もしかすると、あの目……なんだか昨日の二つの光に見えなくもない。

そのあと色々調べて解ったのだけれど、きっと私の家から漏れた光が、あの黒猫の瞳に反射して輝いていたのだ。

私は初めて外に興味を持った。あの黒猫とお話したい。

でも、如何すれば良いのか解らない。私は外には出て行けないのだ。きっと外に出たらお父さんとお母さんに怒られる。それは厭だ。

お昼を過ぎると、黒猫の姿は窓の外の何処にもなかった。もしかすると自分の家に帰って、お昼ご飯でも食べているのかも知れない。私のお腹が、ぐうっと音を立てた。

空腹を紛らわす為にお昼寝をすることにした。いつもなら何度も読んで飽きてしまった様な絵本なんかを戯れに読み進めるのだけど、今日はそんな気分ではなかった。

ベッドの上に寝転がって、先ほど見た黒猫のことを考える。猫も夢を見るのだろうか。見るとしたらどんな夢を見るのだろうか。楽しい夢だろうか。悲しい夢だろうか。私みたいに風船を膨らませて遊ぶ様な、楽しい夢であれば良いな、と思った。

夜、お父さんとお母さんが帰ってくる。

そこからはいつも通りの光景。お母さんが夜ご飯を作り、お父さんは、今日は何をしていたんだい、と尋ねてくる。私はそれに、ご本を読んでいたの、と答えた。お父さんは満足そうに笑顔で頷く。

本当はお昼寝をしたり、窓硝子に埃を使って絵を描いたりしていたのだけど、それは内緒だ。

食事にあまり話をしてはいけない。かちやかちやと食器同士がぶつかる音だけが響く。

食事のあとにお父さんとお母さんに話してみた。

窓の外にね、黒い猫がいたの。私ね、あの黒猫さんとお話したいわ、と私は言った。だって、毎日が退屈なんだもの、とは流石に言えなかったけれど。

お父さんもお母さんも、うーむ、と唸ったきり返事をして呉れなかった。やっぱり、私が外に出ることは出来ないのだ。でも、それは仕方がない。お父さんもお母さんも私のことを世界で一番愛して呉れている。外に出て万が一にも怪我をしない様に、私を守って呉れているのだ。

ごめんなさい、お父さん、お母さん。私がいけないの。悪いのは私なの。もうお外のことなんて如何でも良いわ。この家の中で、お父さんとお母さんと一緒に暮らしていければ、私は幸せなの。

私がそう言うと、二人は満足そうに頷いて、私の頭を撫でた。嬉しかった。

翌日、昼過ぎにまた窓の外に黒猫がいた。

のんびりと太陽の下を歩いている。外は危ない。自動車という危険な機械がそこいらを走り回っているらしいし、危険な思想を持つ人間が沢山いるらしい。そんな危険な外に、あの黒猫は堂々と暮らしている。その漆黒の身体は、私の履いている靴の色に似ているけれど、何故だか何処か違う気がした。同じ色なのに、変なの。

私の好きな色は黒だ。見ていてほっとする。私のドレスも白と黒のコントラストが綺麗で気に入っている。それでも、黒猫の黒には私では追いつけない。そんな気がした。黒は夜の色。黒猫の色。じゃあ私は、何色なのだろう？

夜。

お父さんとお母さんが仲良く帰ってきた。

お母さんが手に大きな袋を抱えている。黒いゴミ袋みたいだった。仕事で使うものなのかも知れない。ここでも黒だ、とピンときた私はひっそりと微笑んだ。

その日も、いつも通りにことが進む。

お母さんは早速料理を開始して、お父さんはいつも通りに、今日は何をしていたんだい、と尋ねてくる。ご本を読んでいたの、と私もいつも通りに答える。そうすれば、お父さんは満足そうに笑顔で頷く。これで良いのだ。

違ったのは、その日の夜ご飯の献立だ。

私の目の前には、白いご飯とお味噌汁、そして胡瓜の漬物。そして、もう一品。お肉があった。ほかほかと湯気を立てている。

さあ、いただきます。今日はお肉を特別に食べてもいい日よ、とお母さんが言った。困惑した私は事態についていけない。まさか、私がお肉を食べられるなんて。夢でも見ている様だった。いや、夢の中でもお肉を食べたことのない私にとっては、夢以上のことだ。

逸る気持ちを抑えて、箸をお肉に伸ばす。手が震えてしまう。これが初めてのお肉。生まれて初めてなのだ。

箸で触った感触は非常に柔らかくて、すっと小さく切ることが出来た。ぱくっと一口食べてみる。口の中に広がるお肉の味。お肉の味なんて、初めてお肉を食べるのだから解りもしないけれど、これがお肉の味なのだ、と脳みその奥にしっかりと記憶した。大人が食べるだけあって、お肉はとても美味しかった。いつも食べている胡瓜の漬物なんて、お肉の前では無に等しい。

如何だい、美味しいかい、とお父さんに訊かれたので、正直にうん、と頷いた。自然と笑顔が零れた。お父さんもお母さんも、それは良かった、と満面の笑みを浮かべた。今日はとても幸せな日だ。ぐっすり眠れそうだ。

お風呂から上がり、ほくほくした身体で部屋に戻ろうとした時に、廊下にあの黒いゴミ袋が置いてあるのを見つけた。普段ならお母さんの持ち物には絶対に触ってはいけないのだけれど、この時の私はひどく上機嫌であり深く考えずにそのゴミ袋の中身を覗き込んだ。その中には黒い塊があった。

何だろう、と思って袋の中から取り出すと、それは黒猫だった。窓の外にいた黒猫だった。

べっとりと赤黒い液体がついている。きっとお風呂に入っていないのだ。

手に掴んだ黒猫の身体を見て、まあ、こんなにも薄っぺらだったかしら、と思わず呟いた。

なんだかぺらぺらの紙みたいだった。猫とはこういう生き物なのだろうか。

きっとこれはお母さんから私へのプレゼントだ。昨日私が黒猫の話をしたから、わざわざ捕まえてきて呉れたのだ。

私はもう本当に嬉しくて堪らなくて、その日は黒猫を腕に抱いて寝ることにした。

黒猫は一言も話さない。猫は無口なのかも知れない。でも、これで明日からの毎日がちっとも退屈じゃなくなるだろう。薄っぺらの黒猫は、私の初めての友達。明日は一緒に遊ぼうね。

今日はなんだかたくさん良いことが起こり過ぎて、ベッドの中で私は嬉しさから涙した。

こんなにも幸せな家庭が、他にあるだろうか。

こんなにも素敵な両親が、他にいるだろうか。

生まれてきて良かった、と心から思った。

黒猫におやすみ、と挨拶をして、ゆっくりと私は眠りについた。

